

## 韓愈「鱷魚文」の位置

谷 口 匡

### 一、はじめに

韓愈（七六八—八二四）に「鱷魚の文」<sup>〔一〕</sup>（鱷魚文）と題する散文がある。これは潮州に繁殖して家畜を食い荒らしていたワニの一種「鱷魚」に対して同地を立ち去るように命令する特異な内容の文章である。この文章は両『唐書』に引用され、韓愈が潮州に左遷された元和十四年（八一九）、五十二歳の時に書かれたものとされる。

小稿では、この「鱷魚文」という散文が過去にどのような読まれてきたかをジャンル論的な観点から検討し、本作品が中国散文学史上において占める位置について論ずる。

### 二、「鱷魚文」と両『唐書』

「鱷魚文」がよく知られるようになったのは、両『唐書』に引用されることが大きい。しかしその引用の仕方には大

きな差異がある。たとえば、現行の韓愈の文集では、稷徳の君主は遠方の地を領有できず、長江・漢江流域はもとより、さらに遠い潮州を見捨ててきたこと、鱷魚が繁殖するのに潮州自体がもと適した地であつたことを、

及後王徳薄、不能遠有、則江漢之間、尚皆棄之以与蛮夷楚越、況潮嶺海之間、去京師万里哉。鱷魚之涵淹卵育於此、亦固其所。

と述べている。ところが『旧唐書』卷一六〇韓愈伝では、

前代徳薄之君、棄楚越之地、則鱷魚涵泳於此可也。と半分以上短くなり、韓愈の文のごく一部を使つて全体を要約している。それに対して『新唐書』卷一七六韓愈伝は、

及徳薄、不能遠有、則江漢之間、尚皆棄之以与蛮夷楚越、況潮嶺之間、去京師万里哉。鱷魚之涵淹卵育於此、亦固其所。

とあるように、「後王」「海」の三字を欠くだけで、ほぼ韓

愈の原文を踏襲している。一般に、『新唐書』と比較して原資料をそのまま用いる傾向があるとされる『旧唐書』が、韓愈の原文を簡略化しているのはなぜだろうか。結論からいうと、『旧唐書』では「鱷魚文」を事実としてのみ扱った。つまり、潮州において韓愈がワニを駆逐したことを述べるためにその証拠として使った、ということが考えられる。たとえば『旧唐書』の柳宗元伝で、柳宗元が柳州の刺史に左遷されていた時に奴隸を解放したことが書かれたように、韓愈の場合も地方官としての善政を書こうとした。それがこの潮州における鱷魚の駆逐だったのではない。

ところがたまたまそのようにして部分的に用いられた「鱷魚文」は、『新唐書』ではほぼ全文が復活する。清の趙翼が『新唐書』の撰者である歐陽修と宋祁は韓・柳の古文を好み、よって宋祁は列伝において韓・柳の文で史実として取り込めるものはすべて入れた<sup>(2)</sup>と述べているが、つまり、宋祁が「鱷魚文」を全文引用したのは単に事実を補強するためではなく、文章として重視したとも考えられる。<sup>(3)</sup>もともと韓愈の古文を信奉するがゆえに全文引用する必要がない文章をむりに取り入れた可能性もあり、従って逆に金の王若虚のような「韓愈の鱷魚文は、全然佳作ではない。史官は事実だけを書けば十分であった。必ずしも

全文を収録する必要はなかった<sup>(4)</sup>という批判が現れる。これは王若虚の時代には「鱷魚文」の文章としての価値はまだ広く認められてはいなかったということを表している。

両「唐書」の両方またはいずれかに引用されている韓愈の自作の文には「鱷魚文」のほか、「進学解」「論淮西事宜状」「論仏骨表」「潮州刺史謝上表」がある。<sup>(5)</sup>このうち、淮西節度使吳元済の討伐を勧め、その方策を説いた「論淮西事宜状」は『旧唐書』にはなく『新唐書』のみに節録、死罪を免れ潮州刺史に左遷されたことに感謝した「潮州刺史謝上表」はいずれでも節録である。これらは韓愈の伝記上の事実や立場を述べるために引かれたにすぎないものであろう。いずれでも全文が引用されるのは、かの仏教排撃の上奏文として名高い「論仏骨表」と、官界における不遇感を教官と学生の対話形式で表明した「進学解」である。

この二篇および「鱷魚文」について、さらに範囲を広げて後世の主な散文の総集でどのように採られたかを見てみよう。今回対象としたのは、宋代では①李昉らを編者とする『文苑英華』一千卷、②姚鉉の『唐文粹』一百卷、③呂祖謙の『古文関鍵』二卷、④楼昉の『崇古文訣』三十五卷、⑤真德秀の『文章正宗』二十四卷、⑥謝枋得の『文章軌範』七卷、⑦王鏊の『古文集成前集』七十八卷、元代では⑧

黄堅の『古文真宝後集』十卷、明代では⑨鄒守益の『統文  
章軌範』七卷、⑩唐順之の『文編』六十四卷、⑪茅坤の『唐  
宋八大家文鈔』一百六十四卷、⑫賀復徴の『文章弁体彙  
選』七百八十卷、清代では⑬吳楚材・吳調侯の『古文觀止』  
十二卷、⑭沈德潜の『唐宋八家文読本』三十卷、⑮乾隆帝  
の『唐宋文醇』五十八卷、⑯姚鼐の『古文辞類纂』七十五  
卷、⑰曾國藩の『經史百家雜鈔』二十六卷の諸集である。

『論仏骨表』に関しては、⑤⑦⑩⑫⑭⑰に採られ、  
後世になるほど収録される確率が高くなっているが、明代  
でも青少年向けの入門的読み物である⑬では落ちている。  
ほぼ宋代からずっと収録されているのは「進学解」であつ  
て、①②④⑦⑰に収める。③⑥などに採られなかったの  
はこれらが作文の規範としての文章に主眼があり、その時  
代の代表作を選ぼうとしたものではないからであろう。

一方、「鱷魚文」が採られたのは④⑪⑰で、④を例外  
として明代くらいからにわかに定着するようになる。「進  
学解」が、東方朔の「客難」、揚雄の「解嘲」などのいわ  
ゆる説論ジャンルの流れを汲んだ作品であり、すなわち伝  
統的に文学として認められてきたのに対して、「鱷魚文」  
は鱷魚を追ひ払うという内容の、いわば過去に前例のない  
タイプの散文であつた。「鱷魚文」が明代以降の総集によ

うやく選ばれるようになることは、その頃になつて  
作品としての価値が一般的に認められるようになったこと  
を示す。

そしてそのきっかけを作ったのが『新唐書』における全  
文の引用であつた。「鱷魚文」は韓愈の散文を百十五篇も  
収めている『文苑英華』においてすら、その選から漏れて  
いる。『文苑英華』が刊行されたのは『新唐書』より先で  
あつて、まだ「鱷魚文」は、鱷魚を駆逐した文章という以  
上の価値を見出されていなかったのであろう。同じく勅撰  
の『唐宋文醇』では『文苑英華』より少ない九十九篇の収  
録作品の中に「鱷魚文」を含めており、清朝にあつては読  
まれるべき作品の一つに数えられていたと考えられる。

### 三、「鱷魚文」と潮州における韓愈伝説

『旧唐書』では「鱷魚文」の引用のあとに、その夕方に  
暴風と雷がおこり、数日のうちに池の水が涸れ、鱷魚はも  
と池のあつたところから西六十里に移動し、これ以来、鱷  
魚の被害がなくなった、と書き添えており、『新唐書』も  
ほぼそれに従っている。つまり「鱷魚文」という文章にこ  
うした尾ひれがついて、韓愈についての一種の伝説が作ら  
れることとなつたが、これに先立ち晩唐の張説が撰した小

説集『宣室志』にもおおよそ次のような話がでてゐる。

韓愈は潮陽の太守（刺史）に左遷された。以前から郡の西の大池に鰐魚わにがいて住民を困らせていた。韓愈は人間の心が鬼神にも通じ、鳥獸を教化できると考え、池のほとりにいけにえと甘酒を供え、「お前は魚類である、人間を困らせないように」と祈った。その夕方に暴風が起り、翌日になると池の水がみな涸れてゐた。調べさせると池の西六十里に池ができ、鰐魚はそこへ移つてゐた。それ以後、郡民は災いから解放された。だから皇甫湜の「愈神道碑序」に韓愈が潮陽の刺史に着任すると「南西地方の蛮族も、楽しんで自然と教化され、鰐魚や稲を害する力76も、人々の物を荒らさなくなつた」とあるのだ。6

これは、両『唐書』に述べる逸話とほぼ同じものである。この『宣室志』のような話が残っている以上、こうした言い伝えが現実には流布しており、『旧唐書』は『宣室志』に依拠して鰐魚を駆逐する話を仕立て上げたのであろう。

さて韓愈が鰐魚を追い払つた話は、宋代に歐陽修が陳堯佐の神道碑を書いた時、堯佐が潮州で人食いワニを退治したことを述べたあとに、「昔、韓公が鰐魚を論して従わせた。今、陳公は鰐魚を殺して恐れさせた。行為は異なるが、

気味の悪いものどもを革め正して人々に利をもたらした点では同じだ。わが潮州は三百年間に二人の大人物を得た」と引き合いに出され、蘇軾が韓愈を顕彰して書いた「潮州韓文公廟碑」8の中でも、「能く鰐魚の暴を馴らす」と言及された。『新唐書』や欧・蘇の文は、南宋の魏仲举が編んだ五百家注本に題下注として採られ、後の世綵堂本さらには東雅堂本などの通行したテキストにも受け継がれて、この文章に関する一種の解題になっている。これらは韓愈の潮州刺史としての声望を高めるものであつたと同時に、「鰐魚文」の散文としての地位を確立するのにも与つたと思われる。

#### 四、「鰐魚文」のジャンルの変遷

では、鰐魚に告げるといふ、この風変わりな文章はどのようにに世に受けとめられていたか。それは文章のジャンルの面に注目して考えるとわかりやすい。

そもそも韓愈の門人李漢が四十巻本の『昌黎先生集』を編纂した際の「序」には、「賦四、古詩二百一十、聯句十一、律詩一百六十、雜著六十五、書啓序九十六、哀詞祭文三十九、碑誌七十六、筆硯鰐魚文三、表狀五十二」と全体の構成を示し、「筆硯鰐魚文」を「碑誌」と「表狀」の

間においている。「筆」は筆を擬人化した伝記「毛穎伝」、「硯」は壊れた硯を土に埋めるにあたっての記念の文章「瘞硯銘」である。「三」とあるので「鱷魚文」は恐らくこれらと一括りに三篇だけでまとめられた。但し「筆硯鱷魚文」という言い方からすれば、この時の分類は他に挙げられたジャンルでは収まりの悪い文章を寄せ集めただけの、いわば便宜上のものであった。その後のテキストでも全体で四十巻として「碑誌」と「表状」の間の巻三六におくという基本的な編成は変わらなかったと思われるが、南宋中期の蜀本では上記の三篇に「下邳侯革華伝」と「送窮文」の二篇が加わり、巻頭につけられた分類は「文・伝」というジャンル名に変更された。<sup>(10)</sup> 現行の「瘞硯銘」が「瘞破硯文」となっていることからすると、これは内容というよりも末尾が文と伝で終わる篇名によって整理したのであろう。さらに南宋末に出版された世綵堂本『昌黎先生集』では同じ五篇の文章を「雜文」として分類した。これはもう一つの系統のテキストである五百家注本でも同じであって、これ以後「雜文」ジャンルとして定着する（なお世綵堂本では「下邳侯革華伝」は題名のみ残って本文を欠く）。

一方、事実上どのようなジャンルとして読まれたかを見る上では、作品の題名が重要な手がかりとなる。すなわち

宋の蜀本の中には題名を「祭鱷魚文」に作るものがあり、また上述の総集のうち、⑪⑬⑭⑯など明代以後のそれにおいてもしばしば「祭鱷魚文」という題で採られた。すなわち祭文という枠組みで価値を見出されていたのである。

こうした祭文と考える見方に対して、清朝になると少なくとも二つの動きがあった。一つは康熙年間に林雲銘が編んだ『韓文起』で、「送窮文」とともに巻一「文類」にこの文を置く。そして「文中には『告げる』とのみあり、『祭る』の語は全くない。よって李漢は『雜著』に編入して、『祭文』の巻に並べなかった。後人はこの意図を理解せず、題目に無理やり『祭』の一字を加えたのである。今は李漢のテキストに依るのを正しいと考える」と注す。<sup>(12)</sup> ここから当時、一般に「祭文」として扱われていたことが窺えるが、林雲銘はそれに反発して李漢の分類に戻ろうとした。

また一つは姚鼐（一七三二—一八一五）の『古文辞類纂』で、題名を「祭鱷魚文」としながらもこれを「詔令類」に分類し、「喻巴蜀檄」のすぐあとに置いて実質的には檄文の類と考えるもので、曾国藩（一八一二—一八七二）も同様に『經史百家雜鈔』において「祭鱷魚文」の題のまま「詔令之属」に入れ、「文の氣勢が『巴蜀に諭す檄』と似ている。向こうは雄渾で深く、こちらは勇ましく力強い」と評して<sup>(13)</sup>

司馬相如の「喻巴蜀檄」との類似を見ている。

以上のように「鱷魚文」は表向きにはしだいに「雑文」ジャンルに定着していく一方で、実際は祭文としても読まれ、その後さらには檄文としての見方も加わるようになった。ではこうしたジャンルの変遷について、それぞれの見方がなぜおこったかを一々検討してみよう。

## 五、祭文としての「鱷魚文」

元来、「雑文」に分類されていた「鱷魚文」が、のちになぜ「祭文」と考えられたか。それは「某年某月某日、潮州刺史韓愈、軍事衙推秦濟を派遣して、羊一頭と豚一頭を惡溪の深い水の中に投じて、鱷魚に食わせ、かつ告げて言う」というこの文章の冒頭が、祭文のそれに倣うからである。

ではなぜ韓愈は「鱷魚文」においてそのような書き方を用いたのだろうか。それはこの作品の主人公である鱷魚という生き物の特性と関わっていると思われる。今、類書に現れる記述を手がかりに古来、鱷魚が人々からどのように見られていたかを概観してみよう。

呉の康泰の『吳時外国伝』に、扶南王范尋が鱷魚を堀の中で飼って逆鱗に触れた者を縛り上げて与え、鱷魚が食う

か否かで死罪か無罪かを分けたと見え、同じことを『梁書』卷五四「諸夷」や『南史』卷七八「夷貊上」にも載せる。

晋の張華の『博物志』には、南海の鱷魚の頭を斬って乾燥させ、齒を抜いても三回まではまた生えるといい、『廣州異物志』にも、齒は十日ほどで再生するとある。

唐の劉恂の『嶺南錄異』には、鰐魚が棲む早瀬のことを記す。鹿は鱷魚を大変恐れ、その近くに來るときつと崖から落ちて餌食となる。また李徳裕が潮州に左遷された時、その早瀬を通過して船が破損し、大切にしていた古書や画を一度に失った。船の奴隸に捜させようとしても、鱷魚が異常に多く、容易に近づけなかったという。

唐の李淳風の『感心経』には、鱷魚は数百の卵を産み、それが蛇・龜・鼈・魚・鼉・蛟など十数種に形を変えて生まれ、人に殺されると雷電風雨を起こす靈妙な力があり、神や竜のたぐいに近いとある。

これらの文献に現れる鱷魚は、人を食う獐猛な獣というだけでなく、不思議な力をもった生き物としての特徴を備えている。すなわち当時の中国の人々は鱷魚をただ恐ろしがっていたのではなく、竜などにも通じる神秘性を見出していた。さればこそ韓愈は鱷魚に呼びかける「祭文」の形式で「鱷魚文」を書くことができたのである。

さて韓愈は元和十四年の夏から秋にかけて「潮州祭神文五首」<sup>(16)</sup>を書き、翌元和十五年の夏に「祭袁州祭神文三首」<sup>(17)</sup>を書き、さらに長慶三年に「祭竹林神文」<sup>(18)</sup>を書いている。こうした文章は同じ祭文ジャンルでも、亡くなった人を祭る一般的な祭文とはやや異なる。たとえば「潮州祭神文五首」の其二は潮州刺史に着任した韓愈が、長雨のために稲や蚕が育たないのを案じて、当地の湖の神霊に天氣の好転を祈ったもので、「祭竹林神文」は、京兆尹の時代に日照りによる不作を憂えて、竹林の神に雨を請うたものである。

しかしその文章の形式、たとえば、冒頭と末尾に注目してみればさして特殊とはいえない。前者は「某年某月某日、潮州の刺史韓愈が謹んで清酒と干し肉を供品として、大湖の神にお祈り申し上げます」<sup>(19)</sup>で始まり、「神よ、どうぞ供物をお受け下さい」で終わる。また後者は「某年某月某日、京兆尹兼御史大夫の韓愈が謹んで酒と干し肉を供物とし、再拝稽首して竹林の神に申し上げます」<sup>(20)</sup>で書き出し、やはり「どうぞ供物をお受け下さい」で結ぶ。すなわち祭礼を行うことを神霊に告げることで首尾が一貫しており、こうした書き方は一般の祭文となんら変わらないものといえる。褚斌傑氏は「旧時、祭文は山川の神がみをまつたり、古人や旧跡をしのんだりするさいにも、もちいられた。」「山

川の神がみをまつるものには」たとえば、韓愈に「祭竹林神文」があり、白居易に『祭龍文』がある。こうした作は、当時の民俗に影響されており、内容的にはとるにたりない。ただ韓愈の『祭鰐魚文』だけは、すこぶる有名になっている<sup>(21)</sup>とし、「鰐魚文」をこうした山川の神を祭る「祭文」の一つと見なす。しかし、「鰐魚文」は必ずしもこれらの祭文と同類とはいえない面がある。確かに書き出しこそ上述のように祭文の形式をとるが、文章の結びは「……天子が任命した役人に反抗し、彼の言うことを聞かず、移動して避けず、頑固で物分りの悪い者どもとともに民や物を害するものは、すべて殺してよい。刺史は才能と技芸をもつ役人と人民を選び、強力な弓と毒を塗った矢を持つて鰐魚と戦いを交え、すべて殺し尽くすまでやめぬ。くれぐれもそうなつてから後悔せぬように」<sup>(22)</sup>と鰐魚に對し、刺史に殺される前に早く立ち去るように強い調子で諭すものである。「鰐魚文」が特異なのは、祭文の形式を借りたようで、実際はそうでないところである。褚氏が「これは祭文だが、じつさいは鰐をおつばらう文なのだ。その行文たるや、明快にして氣勢もあふれており、通常の神怪をまつる文とは、ちがったものになっている」<sup>(23)</sup>とも述べるように、そこには祭文の枠にはまりきらない特色が覗いているのである。

## 六、檄文としての「鱷魚文」

かくて「鱷魚文」は檄文とも見なされるようになる。曾國藩が「鱷魚文」を「喻巴蜀檄」に擬そうとするのは、潮州という南方の地に巣くう鱷魚を追ひ払うという前者のテーマと、西南の夷狄を討伐すべく巴蜀兩郡の人々を叱咤激励するという後者のテーマの類似からくるものでもあろう。だが理由はそれだけではない。たとえば作品中の次の部分、

現在の天子は唐朝の帝位を継ぎ、神聖で情け深く威勢があられる。四海の外、宇宙以内の地は、すべて唐朝の慰撫と統治のもとにある。ましてや潮州は禹の足跡が至った、古代の揚州と隣り合う所で、刺史・県令が統治する区域であり、貢物を献上し税金を納めて、天子が天地や祖先や神々に対して祭祀を行うのに供する所なのだ。鱷魚は刺史とともにこの地に同居するわけにはゆかぬ。<sup>(24)</sup>

と、現在の天子の威厳や潮州という地域の由緒の正しさを強調した箇所や、

刺史は天子の命令を受けて、この地を守備し、住民を治めているのに、鱷魚は凶暴な様相をして悪溪の深い水の中に安住しようとしな<sup>い</sup>。それどころかここを占領して人々の家畜・熊・豚・鹿・のろを食<sup>べ</sup>、その子孫を繫

殖させ、刺史と対抗している。刺史が臆病で無能だとしても、どうして鱷魚に低頭してへりくだり、恐れおののいて正視できず、民を治める官吏として恥をさらしながら、この地で無為に生を食<sup>う</sup>ることができようか。加えて天子の命令を奉じてここに役人として来ている以上、鱷魚とは是非の決着をつけないわけにはい<sup>か</sup>ない。<sup>(25)</sup>

と、数々の悪事をなす鱷魚のようすを述べつつ、それに対して刺史は断固とした立場をとるべきだと主張した箇所などは、文の調子そのものが檄文に近い。

『文心雕竜』檄移篇に「檄文の主要な特徴としては、あるいは味方のりっぱで盛んなさまを表し、あるいは敵の苛酷で残酷なさまを述べ、天道を指し示し、人事を分析し、強弱を計算し、権勢を量る。……よって檄文の制作においては意味を定める場合も言葉を用いる場合も、強固で力強くなければならぬ。……必ず事理をはつきりと記し、氣勢を盛んにし断固とした言葉遣いを用いるのが、檄文を書く際の要点である」と檄文の特色を述べるが、「鱷魚文」の上記の箇所などはまさにそれを備えている。

よって、加固理一郎氏の指摘<sup>(27)</sup>のように祭文は制約の少ない文体なので唐代においては誄や哀辞を吸収して、新しい形の祭文が生まれたのだとすれば、韓愈の場合は別な形で



新しいジャンルを開いたのだといえるかもしれない。

ただ祭文であれ檄文であれ、鱷魚を駆逐する目的で書かれた文という点では違いはない。すなわち横山伊勢雄氏が「天子の代理として地方を治める知事は、いつさいの災害に責任をもたねばならなかった。旱魃には雨乞いの祭りをし、祭文を書かねばならなかったし、時にはこうしてワニ退治にワニに告げる文まで書かされたのである。それが官吏に必須の心得となればこうした文章も名文として模倣される<sup>(28)</sup>」と述べるように、本来は刺史の仕事として書かされた、一種の実用文であると考えられるのである。

## 七、雑文としての「鱷魚文」

以上の見方とは異なり、最初から遊戯的な文章であったと考えるのが雑文に分類する場合である。

上述したように、そもそも李漢の編んだ『昌黎先生集』では他のジャンルからはみ出した文章として「毛穎伝」「瘞硯銘」「鱷魚文」を寄せ集めて一つにしていたと思われるが、その後、南宋末までにこれらに「下邳侯華傳」と「送窮文」とが加わって、「雑文」というジャンル名が与えられた。「雑文」という命名には依然として、何らかのジャンルに収まらないものという作品の性格がこめられている

といえなくもないが、ここに一つの独立したジャンルとしての見方が生まれることとなった。清代に林雲銘の『韓文起』が「送窮文」と二篇だけで「文類」というジャンルを立てたのも、あとに「文」がつくという題名で揃えただけではなく、李漢のような寄せ集めの分類とは異なる、雑文としてのある性格付けをしようと試みたのだと考えられる。「鱷魚文」が雑文であるとはどういうことか。一つには、清水茂氏が「はなしがおもしろすぎるし、『昌黎先生集』で、『鱷魚文』は、『毛穎伝』などとならんで、雑文に分類され、たわむれの文章であることがあきらかである……<sup>(29)</sup>」といい、孫昌武氏が「韓愈は遊戯文学をいくつか書いている。……このほかにも『鱷魚文』『送窮文』なども滑稽な内容をもっている<sup>(30)</sup>」と述べるように、「毛穎伝」「送窮文」などと同様に一種の遊戯的な文学と見なす考え方があつた。

さらには寓言としての性格を帯びた「雑文」と見る説もある。呉孟復・蔣立甫『古文辞類纂評注』は、『旧唐書』が鱷魚を駆逐する記事を記したのは『宣室志』によつたもので、信憑性がないという。ただ元和十四年四月に潮州でこの文が書かれたのは確かだとすると、その前年、元和十三年七月に憲宗は李師道討伐の命令を下し、この時点で李師道はまだ屈していないので、文中の「天子が任命し

た官吏」(天子之命吏、「彼(官吏)の言うことを聞かず」(不聴其言)、「服従しなければ」きつと殺し尽くすまでやめない」(必尽殺乃止)といった語句は、実は割拠する藩鎮に対して発したものだとい<sup>(31)</sup>う。すなわち、鱷魚を追ひ払うというのは表面上のことで、実際は藩鎮追放の寓意を含んだ文だとし、文章自体に虚構性を認めるのである。

しかし、「毛穎伝」や「送窮文」がそれぞれ手本となるような先行する作品があったと思われるの<sup>(32)</sup>に對して、「鱷魚文」の場合、それが見当たらない点で二作品と大いに異なる。加えて文中に「現在の天子は唐朝の帝位を継ぎ、神聖で情け深く威勢があられる。四海の外、宇宙以外の地はすべて唐朝の慰撫と統治のもとにある」云々とも述べており、このような唐朝を意識した記述からしても、この文章は実際の政治の場での官吏としての発言であつて、韓愈が初めからこれを遊戯的に作つたとは考えにくい。

但し、そうであるからといつてこの文章に、遊戯的な部分が全くないのではない。滑稽さという点では、鱷魚に呼びかけるという文章の形式がまずそうであるが、さらに、

今、鱷魚と取り決める、三日以内に、おまえの仲間を率いて南に移動して海に至り、そうやって天子が任命した官吏を避けよ。三日で足りなければ五日にのぼす。五

日で足りなければ七日にのぼす。七日で定めなら、つまり結局移動を承知しないということだ。これは刺史のことなど眼中になく、彼の言うことを聞かないということだ。そうでなければ、つまり鱷魚が愚かで聞き分けがなく頭の働きの鈍いということだ。刺史が何か言つても、聞こえないし知らないということだ。<sup>(33)</sup>

と、たたみかけるような調子で鱷魚に撤退を命じる箇所は、『史記』の「滑稽列伝」に登場する淳于髡や優孟の饒舌な口調を彷彿させる。<sup>(34)</sup>そしてこうした点が、祭文の儀礼的な文体や檄文の断固たる調子からはみ出しているのである。

近年、邵伝烈氏も、「鱷魚文」が祭文の形式をとりながら、実際は鱷魚を討伐する檄文になっている点に、韓愈が「雑文」を書く際の表現上の苦心を見ている。<sup>(35)</sup>

#### 八、後世への影響

韓愈以後に書かれた鱷魚に関わる文章としては宋の陳堯佐のものがある。陳堯佐が潮州に流された時、鱷魚を退治したことは既に述べたが、彼はそれだけでなく、「鱷魚図贊」「戮鱷魚文」という二篇の文章を遺している。<sup>(36)</sup>

「鱷魚図贊」は、潮州に通判として着任した陳堯佐が、『唐書』の韓愈の伝に書かれていた鱷魚の話が事実であつたこ

とに感動して「鱷魚の図」を描くに至った過程と、図に付した「贊」とを記したものである。

「戮鱷魚文」は、「鱷魚図贊」を書いた堯佐が、その翌年、実際に村の子どもが鱷魚に食べられるという事件に遭遇して、村民と協力しながら鱷魚を退治するに至るまでの一部始終を記述したもので、その一部は次のようである。

……みな私に言った、「あの鱷魚は捕まえることはできない。深い淵に穴を掘り、激しい波の中を泳いでいる人間の力でどうすることもできぬ」。私はそのようなこととはないと思い、答えて言った、「……法律では、人殺しは死刑である。今、鱷魚が人を食ったのは、いかげなものか。昔、韓愈が文章を投じたら引き揚げて他の場所に避けて行った。ということは鱷魚も知覚があるということだが、どうすれば駆逐できるだろうか。……」。

……こうしたわけで、四方の力ある男百人ほどが、鱷魚を水中から引っぱり出し、口を封じ、足にかせをはめ、大きな船に檻を作つて閉じ込め、流れに随つて運んできた。郡じゅうの者は「これはでたらめだ。人を食う魚などどこにいるか。体が数丈を越えるのにどうやって捕まえるのだ」と言った。鱷魚を見ると、驚きまた喜んで、言つた、「……もし陳公の正義が人々に広くいきわたり、

陳公の命令が役人を厳しく律するということでなければ、どうして巨大な害を滅ぼし、大きな恨みを鎮め、王者の厳格な刑罰をあまねく知らせることができたろうか」。

諸本の「鱷魚文」の題下注ではこの文は取り上げられず、上述の通り、歐陽修の「神道碑」を通して陳堯佐が鱷魚を退治した事実が示されるだけである。しかし清代雍正年間に勅命で重修された類書『古今圖書集成』の「鱷魚部」では、堯佐の二篇の文のうち「戮鱷魚文」を唯一の「鱷魚部芸文」つまり文学作品として拾っている。これは韓愈以前の鱷魚にまつわる文章が志怪的な興味の外に出なかったのに対して、堯佐の文は鱷魚と人間との関わりを書くこうとしているからではないだろうか。ちなみに韓愈の「鱷魚文」は『新唐書』韓愈伝からの引用としてなお「鱷魚部紀事」の中にとどまっている。しかしながら「鱷魚文」は、実際は散文のテーマが志怪的な「紀事」から文学的に変わっていくにあたっての大きな転換点に位置しているのである。

## 九、まとめ

以上のいくつかの考察から次のようなことがいえる。

第一に、韓愈の地方官としての実績を示すために『旧唐書』が節録の形で引いた「鱷魚文」は、『新唐書』では全

文引用された。それは古文家としての韓愈を重んずる編集方針によるものであり、結果的に人々がこの文章に触れるきっかけとなった。しかし総集への収録情況からいえば、広く世に受け入れられたのは明代以後のことであった。

第二に、散文のジャンルとしては、祭文・檄文・雜文など諸家によって揺れが見られる。時間的な流れで考えると、元来は旧来のジャンルからはみ出たために雜文に編入されたが、「祭鱷魚文」という題に作るものが現れ、祭文として一応の地位を獲得した。しかし檄文としての側面が発見されることで、清代に「詔令類」に分類するものが現われ、最近では「送窮文」「毛穎伝」など他の「雜文」と関連させて遊戲的な散文と見る説もある。

このように見てみると、「鱷魚文」は従来の文体に収まらない散文であった。こうしたいわば規範からの逸脱によって新しい文学を創造しようとする試みは韓愈に特徴的なものである。<sup>(38)</sup>だが「鱷魚文」の場合は、本来、鱷魚を追い払うための儀礼的文章であるべきものに対して、韓愈がその枠に収まらない書き方をしたこととでさまざまに読まれる余地が生じ、後に複数の文章ジャンルをさまようことになったのではなからうか。そこに私たちは韓愈が散文文学史上に新しい開拓をなした、という事実を見るのである。

注

(1) 『昌黎先生集』卷三六。なお韓愈の作品の原文・卷数は東雅堂本『昌黎先生集』によったが、引用に際しては新字体に改め、他の諸文献も含めて「鱷」と「鰐」等の異体字については原文を尊重した。

(2) 欧宋二公、皆尚韓柳古文、故景文於唐書列伝、凡韓柳文可入史者、必採摭不遺。『廿二史劄記』卷一八「新書好用韓柳文」

(3) 韓愈の古文への評価が『旧唐書』で低いのに対し、『新唐書』では高いことは王運熙「唐代詩文古今体之争和『旧唐書』の文学観」(『文学遺産』一九九三年第五期)に詳しい。

(4) 韓退之驅鰐魚文、苦非佳作。史臣但書其事目足矣。而全錄其詞、亦何必也。『潯南遺老集』卷二一「諸史弁惑」

(5) それぞれ『昌黎先生集』卷二二、四〇、三九、三九。

(6) 張說『宣室志』卷四。また『太平広記』卷四六六「韓愈」。なお『宣室志』に引く皇甫湜の「愈神道碑序」は「韓文公神道碑」(『皇甫持正文集』卷六)のことであるが、現行の文では「鰐魚」を「鮮魚」に作るなどの異同がある。

(7) 潮州惡溪、鱷魚食人不可近。公命捕得、鳴鼓於市、以文告而戮之、鱷患并息。潮人歎曰、昔韓公論鱷而聽、今公戮鱷而懼、所為雖異、其能異物醜類革化而利人一也。吾潮間三百年而得二公、幸矣。『居士集』卷二〇「太子太師致仕贈司空兼侍中文惠陳公神道碑銘」

(8) 『経進東坡文集事略』卷五五。

(9) 劉真倫『韓愈集宋元伝本研究』(中国社会科学出版社、二〇〇四年)によれば、世に行われた韓愈の版本の大部分は李漢が編集した四十卷本から出ているという(同書二五頁)。

(10) 『宋蜀刻本唐人集叢刊』(上海古籍出版社、一九九四年)所収の『昌黎先生文集』および『新刊経進詳注昌黎先生文』による。なお後者は本文では「文・伝」としながら、「目錄」部分では「雜著」や「狀」の文とともに「雜文」とする。

(11) 前掲『新刊経進詳注昌黎先生文』参照。このことは屈守元・常思春主編『韓愈全集校注』(四川大学出版社、一九九六年)二二一九頁でも指摘される。

(12) 文中只用告字並無祭字、故李漢編入雜著、不列祭文卷内。後人不知此意、把題目硬添一祭字、今依李本為確。

(13) 文氣似論巴蜀檄、彼以雄深、此則矯健。『求闕齋読書録』卷八)

(14) 惟年月日、潮州刺史韓愈、使軍事衙推秦濟、以羊一豬一投惡谿之潭水、以与鱷魚食、而告之曰。

(15) 『太平御覽』卷九三八「鱷魚」、『太平広記』卷四六四「鱷魚」、古今圖書集成『博物彙編禽虫典第一三八卷「鱷魚部」等による。

(16) 『昌黎先生集』卷二二。

(17) 『昌黎先生集』卷二三。

(19) 維年月日、潮州刺史韓愈謹以清酌服脩之奠、祈于太湖

神之靈。……神其尚饗。

(20) 維年月日、京兆尹兼御史大夫韓愈謹以酒脯之奠、再拜稽首告于竹林之神曰、……尚饗。

(21) (23) 『中国古代文体概論(増訂本)』(北京大学出版社、一九九〇年)。訳文は、福井佳夫訳『中国の文章—ジャンルによる文学史』(汲古書院、二〇〇四年)による。

(22) 夫傲天子之命吏、不聽其言、不從以避之、与冥頑不靈而為民物害者、皆可殺。刺史則選材技吏民、操強弓毒矢、以与鱷魚從事。必尽殺乃止。其無悔。

(24) 今天子嗣唐位、神聖慈武。四海之外、六合之内、皆撫而有之。況禹跡所揜、楊州之近地、刺史鼎令之所治、出貢賦以供天地宗廟百神之祀之壤者哉。鱷魚其不可与刺史雜处此土也。

(25) 刺史受天子命、守此土、治此民。鱷魚睥然不安谿潭、抛处食民畜熊豕鹿麋、以肥其身、以種其子孫、与刺史亢拒、爭為長雄。刺史雖驚弱、亦安肯為鱷魚低首下心、佞佞親視、為民吏羞、以偷活於此邪。且承天子命以來為吏。固其勢不得与鱷魚弃。

(26) 檄之大体、或述此休明、或叙彼苛虐、指天時、審人事、算彊弱、角權勢。……故其植義颺辭、務在剛健。……必事昭而理弁、氣盛而辭斷、此其要也。

(27) 「唐代祭文小考——李商隱を中心に——」(『外国語教育論集』第14号、一九九二年)。

(28) 『唐宋八家文 上』(学習研究社、一九八二年)三〇〇頁。

(29)『唐宋八家文 下』(朝日新聞社、一九六六年)二七〇頁。

(30)『韓愈散文藝術論』(南開大学出版社、一九八六年)一八〇—一八一頁。

(31)安徽教育出版社、一九九五年、一〇六〇—一〇六一頁。

(32)『毛穎伝』に關しては宋の葉夢得が南朝の俳諧文に基づくものといひ、『避暑錄話』卷下)、『送窮文』に關しては揚雄の「逐貧賦」との類似が題下注で指摘される。

(33)今与鱷魚約、尽三日、其率醜類南徙于海、以避天子之命吏。三日不能至五日、五日不能至七日。七日不能、是終不肯徙也。是不有刺史、聽從其言也。不然、則是鱷魚冥頑不靈、刺史雖有言、不聞不知也。

(34)『史記』における「滑稽」に關しては、拙稿「史記滑稽考」

『京都教育大学国文学会誌』第三号、二〇〇五年) 参照。

(35)『中国雜文史』(上海文芸出版社、一九九一年)二七六頁。

(36)いづれも四川大学古籍整理研究所編、曾棗莊・劉琳主編『全宋文』第五冊(巴蜀書社、一九八九年)卷一九六所収。

(37)咸謂予曰、彼不可捕也、穴深淵、游駭浪、非人力所能加也。予謂不然、復之曰、……律、殺人者死、今魚食人也、又何如焉。昔昌黎文公投之以文則引而避、是則鱷魚之有知也、若之何而逐之。……繇是左右前後力者凡百夫、曳之以出、絨其吻、絨其足、檻以巨舟、順流而至。闔郡聞之、悉曰、是必妄也、安有食人之魚、形越數丈而能獲之者焉。既見之、則駭而喜、且曰、……向非公之義洽于民、公之令嚴于吏、然自誠而不欺也、又安能殲巨害、平大怨、宣王者之

威刑焉。

(38)川合康三「韓愈の文学様式探究の試み——「画記」分析——」『終南山の変容 中唐文学論集』研文出版、一九九九年、所収) 参照。

(京都教育大学)